

飛行機に乗ったドン・キホーテの世界漫遊



「東京のドン・キホーテ」の名前の由来

12年間の海外生活で40カ国を訪れる

国際電話で最初のあいさつの当惑

“エッ 日本は地球の裏側” だって？

「赤道」クイズ・・・地球をまたぐ

「五つの『あ』の原則」

「日本に行ったら日本人だらけだった！」

世界で語られている日本人のジョーク

寝ている間に仕事が進む「魔法のマクラ」

ライフワークの世界文学紀行

定年後は「ハゲアタマ」で輝こう！



ホームページ <http://homepage2.nifty.com/donky/>

ブログ <http://donky17.cocolog-nifty.com/>

北士会卓話 原稿

ちょっと最初に一つだけ。

<紙コップの手品>

先月、昭島市が主催するシニア向けのマジック教室で習ってきたものです。少しハマってきて 1 年間の教室に登録しました。孫なんかに喜んでもらうことが嬉しい。ちょっとした注目される舞台があることも若さを保つ秘訣。「いつかはみんなを驚かすマジシャンに！」なんて夢がまた一つ増えました。

さて、前回の北士会の際に新しい幹事さんから「卓話を」との話があり、お役に立てればと引き受けたところです。まずは面白い話をと、いろいろ考えた結果、自分が経験してきた海外でのエピソードを羅列紹介することにしました。

タイトルは「飛行機に乗ったドン・キホーテの世界漫遊」。

最初に、なぜ私が「ドン・キホーテ」なのか、からお話します。

「東京のドン・キホーテ」の名前の由来

それは今から半世紀以上も前のことです。小学校 6 年のときの学芸会で「ドン・キホーテ」の劇をすることになり、私がドン・キホーテの家来サンチョ・パンサを演じたのです。以来、その奇想天外の物語に魅せられて少年版の本を、大人になってからは翻訳物の全巻を、またスペイン語がわかるようになると、今度は専門の先生について原書にも取り組んだのです。さらに松本幸四郎がドン・キホーテを演ずるミュージカル「ラ・マンチャの男」の舞台を 3 回も見に出かけたものでした。

正義を求め、強きをくじき弱きを助け、「見果てぬ夢」を追いかけていく——そのドン・キホーテの生き方に魅せられて、私も定年になると自らを「東京のドン・キホーテ」と勝手に名乗り、世界文学紀行「名作の舞台を訪ねて」“見果てぬ夢”に向かって各国を旅している次第です。

物語の中のドン・キホーテは槍を掲げ、愛馬ロシナンテに乗っています。遠くに見える風車を悪魔の巨人と考えたドン・キホーテが槍を持って突進する話は、余りにも有名ですね。作品ができてから 400 年たった現在の東京のドン・キホーテは、槍の代わりにカメラを抱え、馬の代わりに飛行機にまたがっての世界漫遊となった次第です。

12 年間の海外生活で 40 カ国を訪れる

前置きはこのくらいにして、さっそく本題に入っていきます。私はこれまでを通算して、海外にいた期間は 12 年ほど。現役時代に特派員として訪れた国、また定年後に訪れた国を合わせるとちょうど 40 カ国になります。地域的には中南米とヨーロッパが主体でした。

このヨーロッパと中南米とでは大きな違いがあります。旅行でヨーロッパに行くと街は美しく便利で安心ですが、決まりきったコースで、当たり前のことしか経験できません。

一方、中南米に行くと、何が起こるかわからない。飛行機が遅れても何の説明もない。街では盗まれるか、騙されるか、誘拐されるか、下痢をするか、ひいては、おまわりにチ

ップを要求されるか……。この不愉快な体験の中にペーススを発見して楽しくて病みつきになる人と、もう二度と行かないと嫌がる人がいます。

ここにいらっしゃる皆さんもヨーロッパを訪れたことのある人は多いと思いますが、中南米はきっと少ないと思います。そこできょうは、主に中南米、ラテン・アメリカで体験した面白いエピソードのいくつかをご紹介しますと思います。

その1

国際電話で最初のあいさつの当惑

特派員時代の話です。今は文字を相手方に送るのにはFAXやメールが当たり前になっていますが、35年前、私がパナマに赴任した当時は、FAXさえもまだありませんでした。体験談のように急がない原稿は航空便で、ニュース性の急ぎの原稿は、電話で送ったものでした。

書いた原稿を電話口で読み上げます。それを、本社の担当記者が、原稿が短ければそのまま書き留め、長ければテープに録音し、それを再生するわけです。そのとき、まず電話口での最初のあいさつにとまどったものでした。時差の問題です。

例えば、ブラジルで、取材が終わって原稿をまとめ送るのは夜の10時頃。ところが日本では朝の10時です。(ブラジルは日本とちょうど12時間遅れの時差があります)。

こちらはホテルのあまり明るくないライトのもとで「コンバンワ」。でも相手から戻ってくるあいさつは「オハヨウゴザイマス」。しかも、こちらは一日の仕事の疲れでウイスキーなど寝酒の時間なのですが、相手は朝の空気を胸いっぱい吸いながら、モーニングコーヒーで一番張り切っているときなんですね。

エッ“日本は地球の裏側”だって？

そう、ブラジルといえば、こんなエピソードもありました。位置はちょうど日本の真反対にあります。これをある時、ブラジル人と話をしている「日本の真裏のブラジル」と言ってしまう、ずいぶん反撥されたことがありました。

「何言ってるんだい。ブラジルから見れば日本こそ裏側じゃないか！」と。たしかにその通りですね。円い地球から見れば、どちらが表でどちらが裏かは決められないわけです。

ちなみに、南米で見る世界地図は日本のものとはかなり違っています。ちょっと学校で習った世界地図を思い出してみてください。図法によっても違いますが、もっとも一般的なメルカトル図法では、日本が地図のほぼ真ん中にあり、その左側にアジア、ヨーロッパのユーラシア大陸、アフリカ大陸、右側に太平洋をはさんで北米大陸、南米大陸が描かれています。ブラジルなどは右下の端の方にある。

ところが、あちらの地図では、真ん中に北南米大陸が描かれています。ですから、日本の位置はというと、ずっと左上の端、日本の地図でいうイベリア半島、つまりスペインの端、世界の外れのような位置になるのです。彼らの言うことも分かるような気がしますよね。

その2

「赤道」クイズ・・・地球をまたぐ

ここでクイズをしてみましよう。これは中学校の総合学習での講演の際に生徒によく聞いてみる質問です。人生経験の豊かな皆さんにこんなことを聞くと失礼に当たるかもしれませんが・・・

地球儀または世界地図に描かれている「赤道」の正しい定義は次のどれでしょうか？

- ①「地球上に引かれている赤い線」
- ②「地球上の最も暑い点のつながり」
- ③「地球の横腹を一周し北半球と南半球に二分する線」
- ④「地心を通して自転軸に垂直な平面が地表に交わる大円」

3番、4番は一応、正しいといえるでしょう。でも2番は異論が出てきて、さらに1番ともなると論外ですよ。

エクアドルに行った時<実は国名の「エクアドル」とはスペイン語で「赤道」の意味なんです>、私はその「赤道標」といわれるものを訪れました。首都キト市の郊外へ車で小1時間。荒涼とした禿山のふもとの台地に、基台の各辺が約8m、高さ15mほどの、先端に向かってやや細くなっていく四角柱が立っていました。その上に直径3mほどの地球儀がのっかっています。

四角柱の各面には、それぞれ[E][O][S][N]との文字が刻まれています。それぞれスペイン語で「東」「西」「南」「北」の頭文字なんですね。

[E]（東）[O]（西）面にあたるコンクリートの地面の真ん中には、幅10cmほどの1本の線が東西に伸びていました。これこそまさに「地球を南北に二分する」という“赤道”なのです。

でも色は赤でもなく、地面の汚れと土ぼこりで黒色に近くなっていました。私は以前に聞いていた話を思い出し、その線を両足でまたぐと、持っていたカメラを同行の友人に渡し、ポーズをとったのです。友人は破顔一笑。「セニョール・シミズ！とうとう地球をまたぎましたネ」——と。この瞬間、私は地球の南北両半球に足をかけたことになるのだというんです。

たいそうなユーモアですが、言われてみるとついそんな気になってしまうから面白いですねえ。冗談ながら、またいだ両足も股も、熱さでヤケドをするようなことはありませんでした。

周囲の気温は暑さとは程遠く、摂氏10度前後で肌寒いほど。キトが海拔2800mの高地にあるからです。ここから西に1000キロ行くと、同じエクアドル領のガラパゴス。太平洋の赤道直下で、1年中30度前後の熱帯です。

<レジュメの写真：上部の真ん中は「赤道をまたいでいる」写真。その右はドン・キホーテが突進した風車のあるラ・マンチャの平原。その下は、カリブ海の島に住むパナマの原住民クナ族。下の左側は「赤毛のアン」の舞台カナダのプリンスエドワード島でアンが住んでいた家。右は『風とともに去りぬ』の舞台ニューオーリンズのミシシッピ河畔で大道芸人と撮った写真です>

その3

「五つの『あ』の原則」

ところで、これだけ交通や通信の手段が発達しても、人々の生き方や生活慣習はそんなに変わるものではありません。

新幹線が10分か15分おきに正確にピタリと発着する。都内の通勤電車も2～3分おきに入ってくる。少しでも遅れると皆イライラし出すという日本です。

それに比べ、私のいたパナマではそうした問題はありませんでした。それは電車がなかったからです。近場は自動車かバスで、遠くへは飛行機が一般的でした。

そんな分、秒を争う時間正確な日本の競争社会から、何事においてもゆったりしたりリズムのラテン・アメリカに赴任したばかりは、ずいぶんイライラしたものでした。

向こうは何事も「アスタマニャーナ」でよいのです。スペイン語で「あしたまた」という意味ですが、5時または6時になると、仕事が途中でも、店にお客さんがいても「アスタマニャーナ」で帰ってしまう。仕事の約束の期限が守られなくても「アスタマニャーナ」。それよりも自分の生活を大切にしているんですね。

夜遅くまでオフィスに電気のついているのは、大部分が日系の駐在企業でした。もっとも、先ほどお話した時差の関係、ということもあり得ます。パナマと日本の時差は14時間。東京本社が昼間の時間に、上司と連絡を取るためには、向こうは夜の時間に電話をしなければならないわけです。

ところがパナマ人は、社員のみならず役員も、官庁の局長クラスの幹部職員も、定時には殆ど帰ってしまっているのです。

私も、「これこれ、しかじかの取材をいつまでに」との指示を日本から受け、一生懸命取り組むのですが、なにせ相手のあることです。はかどらない交渉と仕事にとうとう「五つの『あ』の原則」を編み上げたのです。

「あせらず」「あわてず」「あくせくせず」「あてにせず」そして決して「あきらめず」

――。

この「五つの『あ』の原則」を心にとどめている限り、それほどイライラすることもなくなってきたわけです。海外ではまさに“郷に入ったら郷に従え”が大事なんですね。

その4

「日本に行ったら日本人だらけだった！」

もう一つの大きな特徴は人種の混交です。よく、ニューヨークは“人種の坩堝（るつ

ぼ)”とされていますが、パナマシティも同じです。ある時、日本での研修会に参加したパナマ人が帰国するなり言ってきました。

「S r シミズ (M r シミズ)、日本での研修会は素晴らしかった。あのシンカンセンにも乗ることができた。日本人は本当に親切で感激しました。充実した日本滞在だった。でも、とても驚いたことが一つあったんですよ。それは、日本に行ったら日本人だらけですネ」と。

先住民のインディオと、新大陸の発見以来、ヨーロッパからやってきた白人、それに運河の建設時に労働者として入った黒人や中国人。その子孫。そしてその混血。またその混血……。極端な言い方をすれば、100人集まれば、100人の肌の色が違うパナマからすれば、彼の発言もうなずけるような気がします。

もっとも、日本も近年は、いろんな国の人々が東京にもまた地方にも住むようになり、状況はかなり変わりつつありますが・・・・。

その5

世界で語られている日本人のジョーク

こうして海に囲まれ、世界でも特異な存在である日本と日本人についてこんな小咄も流布しています。

ここでまた質問です。

「ある日、大洋を航海していた船が事故で沈没してしまいました。海に放り出された乗客は、遠くに見える島に向かって泳ぎだしました。その中のたった3人だけ、この小さな島に泳ぎ着くことができたのです。若い男2人と女1人でした。さて、この男2人は女1人をめぐってどんな行動をとったのでしょうか？」

答えは次の通りです。

フランス人：1人は彼女の夫に、もう1人は彼女の愛人になりました。

イギリス人：なんと2人は、彼女を放っておいて、自分たち2人で愛し合い始めたのです。

イタリア人：2人は彼女を自分が手に入れようと、決闘を始めたのです。

では日本人はどうしたのでしょうか？

日本人：2人は、島のどこかに電話がないかとあわてて探しに出かけました。本社に電話して、上司の指示を仰ごうとしたのです。

——この小咄、日本人の行動形態の特徴をよく表わしていると思いますよね。

もう一つ、同じようなよく知られたタイタニックのジョークがあります。たぶん、知っていらっしゃる方もいるかと思いますが・・・・。<ジェスチャー大きく>

「いよいよ沈没しかけた船から、男も女も我先にと救命ボートへ避難しようとした。大混乱になろうとしている現場で、婦女子を優先させようとして船長が説得を試みま

す」

まずアメリカ人男性に：「キミはヒーローになりたくないか！」（解説）

イギリス人男性に：「あなたは真性のジェントルマンだ！」（〃）

ドイツ人男性には：「君の国の法律ではそうなっているよ」（〃）

そして日本人男性には：「皆がそうするからあなたもそうした方がいいと思いますよ」

日本人は、まず周りに合わせようとするんですね。周囲の目を気にし、突出することを恐れ、横並びを好み、他人のするように自分もする、という傾向を持っている。日本人は、他人の目を気にしすぎるように思いますね。

私の好きなドン・キホーテの言葉です。

「理想と正義に向かって突進するオレのことを、皆はおかしいと言う。でも、やりたいことがあるのに、世間の風評、体面なんかを気にして現実に妥協、やろうとしない彼らこそおかしいんじゃないのかね」

この言葉の後半部分は、日本人のメンタリティー、傾向性をも表わしていると思いますね。

寝ている間に仕事が進む「魔法のマクラ」

国際化とインターネットの普及で、世界はますますつながりを深めています。ここで、最近のパソコン生活最前線のエピソードを紹介してみます。

ちょうど 5 年前に自分のホームページを立ち上げました。すると、知り合いの外国人の友人から、「自分たちも書かれているものを読みたい」との希望が寄せられてきたのです。そこで、それぞれの言語圏や文化にも共通し、興味深かそうなテーマに絞って翻訳を始めました。

でも、正しい翻訳のためは第三者のチェックが必要です。そしてチェックはネイティブが理想なのです。私も日本国内に多くの外国人の友人がいますが、それぞれ忙しくてチェックを頼むのには気が引けます。プロに頼めば相当額のチェック料金を取られるでしょう。

そうこうしているうちに、なんと「記事を読みたい」と言った海外の友人自身が翻訳のチェックを申し出てくれたのです。英語はアメリカに住むKさん、スペイン語はパナマに住むMさんでした。Kさんは横田基地で知り合った元米軍将校、Mさんは私が特派員だった当時の友人で、元獣医。

彼らの申し出に心から感謝しているところですが、これをもう一步広げて考えていくと、なあんだ、アメリカでもパナマでも、そこに住んでいる人はいわば誰でもがネイティブであるというわけです。

こうして、翻訳した原稿を夜、メールに添付して送っておくと、時差の関係で向こうは昼間、早いときには翌朝には私のパソコンにチェックされた原稿が戻っています。こちらが寝ている間に仕事は進んでいるのです。

「フラット化する世界」(トーマス・フリードマン著)がベストセラーになっています。ここでは、パソコンによる仕事が、インターネットを使いアメリカからインドへ、インドからイギリスへ、そしてまたイギリスからアメリカへと地球の昼時間を追っかけて進んでいる、つまりそれぞれの国の労働者は仕事が終わって眠っていても、リレーされたその作業は 24 時間どこかの国で続いていると述べています。

35 年前、私が特派員としてパナマに赴任したころは、メールはおろかファクスさえありませんでした。日本語もローマ字で打ちながらのテレックスによる交信でした。すごい時代に入ったものです！いみじくも友人が言ったものです。

「あんたはいいね。“魔法のマクラ”を持っている。自分がよだれをたらし、いびきをかいながら寝ている間に仕事をやってくれるという魔法のマクラをさ！」

ライフワークの世界文学紀行

ところで私は定年 2 年目に南スペインのマラガ大学に 1 年間、留学しました。中南米で使ってきたスペイン語を本場のスペインでもう一度しっかりと学んでおきたい、また「ドン・キホーテ」の舞台を訪ねてみたい、といったことからでした。

留学生活は予想していた以上に充実して楽しいものでした。そこで私はその記録を「定年留学してみませんか？——60 歳からのアクティブ・ライフのススメ——」といったタイトルの本にまとめ出版しました。

ところがその後、いつしか原因がわからないままうつになり、いつ死んでもおかしくないほどの人生のどん底に陥ったのです。このとき、ここにいる Y 君の激励を受け、北士会でお医者さんの M 君や K 君に電話でお世話になり、今も心から感謝しています。幸いに 1 年未満でうつを克服、もそれ以来、以前にも増して元気に意欲的になったような気がします。仏法でいう「変毒為薬」をできたのです。

そこで始めたのが世界文学紀行でした。6 年前に、出版 400 周年となった「ドン・キホーテ」を皮切りに、「名作の舞台を訪ねて」の旅を始めたのです。ありがたいことに「ドン・キホーテ」の紀行は、信濃毎日新聞にも 5 回にわたり連載されました。

その後、「風と共に去りぬ」の舞台アトランタとニューオーリンズ、「赤毛のアン」の舞台・カナダのプリンス・エドワード島、それからシェクスピアの「ロミオとジュリエット」や「ベニスの商人」のイタリア、昨年は「ハムレット」の舞台デンマーク、それからゲーテの「ファースト」「若きヴェルテルの悩み」、ヘッセの「車輪の下」の作品の舞台ドイツを訪ねてきました。来月 14 日からは、トルストイの「戦争と平和」、ドストエフスキーの「罪と罰」の舞台ロシアへの訪問を予定しています。どれも伊那北高校時代に国語の担任だった小松先生、ジョンさ、から「読むように」勧められた作品です。

これらの取材旅費は原稿料でカバーできることが理想ですが、現実はそんなに甘くありません。無名の、夢だけは大きくても筆力のないへっぽこ物書きです。ときたま、作品によって 3 割あるいは 2 割でもカバーできれば御の字。仮に赤字でも「自分が楽しむ」わけ

ですからこれはもうやむを得ません。そこで今、私はシルバー人材センターを初め、いろんな分野で仕事をして取材旅費を貯えているところです。

ともあれ、「定年後は **Having** でなく **Being** が大事」だと言われています。財産や貯金を持っていること<**Having**>よりも、今、何をやっているか<**Being**>が問題。財布にいくら入っているかが問題ではない。心にどんな夢を描いているかが問題、だということです。

世界には経済的なものだけでなく、もっとエキサイティングで大事なことがいっぱいあります

「夢が、志が人を作る、大きな夢と志は大きな人生を作る」、とも言われています。

現在、北士会で「私の夢」をテーマにメール交信が進んでいますが、私も「夢」こそ未来を明るくしてくれるものだと思っています。たまたま、自分の場合、現役時代に海外に関係があり、また言葉もなんとかできたことから、やや特殊な恵まれたケースかもしれませんが、夢を掲げ、それに向かって努力していけば、どこからか道が開かれてくる、ということを実感している次第です。

「Seniors be ambitious! 熟年よ大志を抱け！」って訴えたいところですね。

定年後を輝いて生きるために

最後に私のモットー「ハゲアタマ」をご披露しておきたいと思います。これは年賀状でも一度、紹介したことがあります。

髪の毛が薄くても、あるいは私のようにほとんど無くても、残念ながら散髪料金は安くはなりません。そんならと、私は「定年後を輝いて生きる」ために、率先してこの「ハゲアタマ」をモットーに生きています。

「はつらつ」と「げんきに」「あかるく」「たのしく」そして「まあるく」です。特にこの最後の「まあるく」が大事ですね。人生、すでに甘いも辛いも経験し、角が取れて「まあるく」なってきたはずですから、今さら人間関係でギスギスしてもしょうがない。穏やかに「まあるく」いくことです。

つまらない顔をしていると、つまらない人生になってしまう。生命に弾むような勢いがあれば、必ず人生も躍動してくる。私はこれからもこの「ハゲアタマ」をモットーに頑張りたいと思っています。

世界の文化比較から禿げ頭論へ、話しはあっちこちに飛んでしまいましたが、皆さんの何かの参考となりヒントとなれば幸いです。

ありがとうございました。

※今日は、時間の都合で中南米でのエピソードが中心だったので、ヨーロッパの面白い話から一つだけ「イタリア最近トイレ事情」と、この3月、古希を記念してホームページに載せたエッセイのコピーを用意しました。時間のあるときご覧になってみてください。